

日托服务“J”的挑战(上)

围绕归国者的护理保险制度，由于人们对于制度本身缺乏了解以及文化差异等原因，引发了很多问题。就在这样一种背景下，我们听说第二代归国者开设了一所面向第一代归国者的日托设施，于是前去采访。在这一期里，我们就为大家介绍一下开办这所设施的经过。

◆好吧，向 I 住宅新村进发

今年 4 月，在 K 县内归国者集中居住的“I 住宅新村”商业街一角，开设了一所叫作“J 日托服务”的设施。与新村居民多文化这一背景相符，其文字标志也用了多种语言。而 J 的旁边，是出生于柬埔寨的居民经营的亚洲食材店，还有华裔开的中国点心铺。

进到 J 里头，左手边的墙上挂着随时放映中国卫星节目的大液晶屏幕；右手边是床位；中间是桌子，还可以看见里面有 J 引以自豪的、可享受中草药足浴的浴室。

经营这家日托服务设施的是第二代 H 先生和其堂兄 U 先生二人。H 先生是所泽中心的第三期毕业生，当时在所泽学习的时候，H 先生还是一名只有十一岁的少年呢！在采访那天，有三名归国者前来日托所，他们要么看看电视，要么做做手工，各随己愿地度过在日托所的时间。其中 A 先生的年龄最大，已经 85 岁。在来日托所以前，完全无法步行的 A 先生，现在已经恢复到可以扶着墙或栏杆走路了！对于 U 先生来说，A 先生能够恢复得这么好，也给他带来了工

デイサービス「J」の挑戦(上)

帰国者の介護保険制度利用を巡っては、制度についての知識不足や文化の違い等、様々な問題が噴出しています。そんな中、一世帰国者のために二世がデイサービス施設を開いたと聞いて、取材に行ってきました。今号では、開設の経緯を中心にお伝えします。

◆ いざ、I 団地へ

K 県内で帰国者の集住する「I 団地」その中の商店街の一角に今年の 4 月、「J デイサービス」が開設されました。多文化の住民が暮らす同団地らしく、団地内の掲示も多言語、J の隣にはカンボジア出身者によるアジア食材店や中国系の中華菓子店が並びます。

中に入ると、左の壁には中国のネットテレビを常時放映している大モニター。右手にベッド、中央にテーブル、奥には、薬草足湯が自慢の入浴室が見えます。

経営するのは二世の H さんと従兄弟の U さん、H さんは所沢センター第 3 期生で、在所時はまだ 11 歳の少年でした。取材当日は 3 名の帰国者が利用者として来所中で、テレビを見たり手芸をしたり、思い思いにゆったりと過ごしていました。中でも 85 歳で高齢の A さんは、ここに通うまでは全く歩けなかったのに今では伝い歩きができるまでに回復されたそうで、U さん自身にとっても A さんの回復がこの仕



作上の干劲儿。

除了 H 先生和其他先生们以外，那一天出勤的家庭助理员还有第三代 B 女士。除了经营这所日托设施以外，H 先生还经营着助理员站，两个设施加起来一共有十七、八名助理员在工作，其中十名是第二、三代归国者。

◆启幕为止的历程

以前在一家运输公司工作的 H 先生通过所接的帮助归国者搬家的活儿，看到了几个年纪大的归国者腿脚不方便，生活很困难。另外其本人的岳母也被认定是要护理 2～3，却无法完全利用护理制度，而在家里呆了三年。这些都让他痛感到归国者有着其特殊的问题。

其一就是语言障碍。H 先生认为语言不通，也就是说不光无法办成事情，还存在着无法与人交流这一重大问题。比如，“热”、“冷”这种程度的日语很多人都会说，可是一旦被突然问及时，由于紧张和害怕，有些归国者会干脆忍着，连最简单的要求都放弃不提。因为没有沟通和交流的机会，于是陷入对沟通和交流这种行为本身感觉麻烦的恶性循环当中。要是不懂日语就无法参与到设施内的活动中去，结果，整天都是一个人默默呆在设施里，那是一种怎样的孤独感呀！很多归国者因为别人推荐而去日托设施，然而回来后便再也不想去第二次。

此外，归国者面前还有一堵巨大的异文化墙壁，那就是饮食文化的差异。设施所提供的伙食自然不用说，即使家庭助理员登门服务的

事のエネルギーの源となっているとのこと。

H さんたちの他に当日勤務のヘルパーは三世の B さん。H さんはこの施設の他にヘルパーステーションも運営しており、そちらと合わせて 17、8 名のヘルパーのうち 10 名が帰国者二世とのこと。

◆開所まで

H さんは以前勤めていた運送会社で請け負った帰国者の引っ越しの仕事に、何名かの高齢帰国者が不自由な体で苦勞しているのを目にし、また自身の義母が要介護度 2～3 なのに制度を利用しきれずに 3 年間自宅にいたことから、帰国者ならではの問題を痛感したそうです。

問題の 1 つは何と言っても言葉の壁ですが、言葉が通じない、つまり用が足せないということだけでなく、“コミュニケーション”がないことの問題が大きいと H さんは考えました。たとえば、「暑い」「寒い」レベルの日本語ならできる人は少なくないのですが、尋ねられてもその場でぱっとうまく言えないという諦めや恐怖心から帰国者の多くは単純な要求すらも我慢して口にできなくなってしまうのだと。コミュニケーションの機会がないと、コミュニケーションに対してますます億劫になっていく悪循環に陥ります。施設内の活動も日本語ができないと参加もできず、一日中押し黙ったまま施設にいる疎外感はいかばかりか。勧められて一回はデイサービスに出かけていっても、帰国者の多くがその後、二度と行かなくなるといいます。

また、もう 1 つの大きな異文化、「食」の壁も帰国者の前に立ちはだかっています。施設

时候，也无法奢望对方用自己想吃的食材做出想吃的味道。在这个问题上，也存在着归国者因为无法明确传达自身意愿这样的语言障碍而往往最终放弃提要求。H 先生也曾听到归国者诉苦说“家庭助理员每天都只给自己吃没有蔬菜的酱油面（归国者只会说酱油面）”。

应该改变这样的情形！H 先生生出了这个想法，并于两年前在当地设立了上门家庭助理员站，为开设日托设施做起了准备。但是，刚刚启动时，对日本的制度不太熟悉的 H 先生听说要先成立一个组织，于是不假思索地开了一家株式会社。要是办成 NPO 或普通的社团法人也就算了，一个刚刚进入业界的归国者，还打着一面“株式会社”的招牌，因此陷入难以获得行政理解及组织补助的困境，这让 H 先生很是后悔。尽管也有一些社会性企业选择的是株式形态，因此不好一概而论，但 H 先生却颇为愤慨：“自己做的是有益于社会的事，为什么要受各种限制？”这关系到日中两国对于公益事业及企业之看法及观念的差异，让我们认识到在这一点上，日中两国之间也存在着文化隔阂。我们将在下一期里继续为您介绍！

(An)

转载自《同声同气》第 56 期

提供の食事はもちろん、訪問介護でも、望む素材と味付けの食事は望むべくもありません。ここでも要望をきちんと伝えきれない言葉の壁との相乗作用で、高齢者は全てを諦めてしまいがちです。H さんの耳には、毎日ヘルパーに素うどんだけ食べさせてもらっていた(それしか要求できなかった)帰国者の例も入ってきていました。

これは何とかしなくては、と考えた H さんたちは 2 年前に地元で訪問ヘルパーステーションを作り、通所施設開設の準備を進めました。しかし、立ち上げ時、日本の制度に疎かった H さんは、まず組織を作る必要があると言われて、何も考えずに株式会社を作ってしまったのです。NPO か一般社団法人にしておけばよかったのに、と後に悔やむことになるのですが、ぽっと出の帰国者の、しかも「株式会社」という看板の故に、行政の理解や団体助成が得られない状況に陥ってしまいました。社会的企業で株式形態をとっているところもあるので一概には言えないことですが、「社会的に有意義なことをしているのになぜ」と H さんは憤慨。この辺は公益と企業に対する見方の日中の違いもあり、こんなところにも異文化の壁が存在したかと考えさせられました。以下、次号！ (An)

『同声・同気』第 56 号より転載